

# 中田 エミリー × 水谷 浩之

Special Interview  
新潟で働く  
私たちの思い  
Vol.01  
KASHIWAZAKI-KARINAWA  
NUCLEAR POWER STATION



※安全を確認の上、防護メガネをはずして撮影しています。

2017年11月取材

PR

## 実現したい思いがある。追求し続けたい安全がある。

みなさん、こんにちは。中田エミリーです。  
突然ですが、原子力発電所って聞いて何を思いますか？  
「何をやっているかわからない」「福島事故のこともあるし、何となく不安」  
なんて思っていないでしょうか。私も同じです。だから来ちゃいました、柏崎刈羽原子力発電所。  
今、発電所でどんな人がどんな仕事をしているのか、  
直接会ってスバリ話を聞いちゃおうと思います。  
まずは何事も知ることから始めないとね。

電気を作っていない発電所って、  
今、何をしているんですか？

中田 こんにちは。今日はよろしくお願  
います。ところで水谷さんは、発電所でどんな  
事をしていらっしゃるんですか？  
水谷 今は、主に安全対策設備の設計などを  
担当しています。例えば、水密扉の設置もその  
一つです。

中田 水密扉？

水谷 柏崎刈羽原子力発電所では、津波や浸  
水に備えた安全対策をいくつも行って  
います。その中の一つで、建物内の重要な機器などが  
ある部屋に水が入らないように設置されて  
いる扉が水密扉です。



中田 これが水密扉…すごく分厚いですね。  
それにすごく重い。

水谷 厚さは、約20センチメートルあります。  
ただ水が入らないようにするだけではなく、  
強い衝撃や水深10メートルの水圧にも耐えら  
れるように作られています。

中田 これなら確かに水は入ってこなさそう  
ですよ。発電していないのに、いろんな仕事  
があるんですね。

水谷 ええ。稼働していない今でも、安全対策  
工事などで、たくさんの方が発電所で働いて  
いるんですよ。

中田 へえ、そうなんだ。

福島第一原子力発電所事故で  
安全に対する考え方が  
変わったりしたんですか？

中田 津波と聞くと、やっぱり福島第一原子  
力発電所事故を思い出しますが、あの時は  
どうされていたんですか？

水谷 私はもともと地震対策の技術者だっ  
たので、それほど大きな地震に耐えられる発  
電所を設計すればよいのかという仕事をし  
ていました。そんな時に起こった東北地方太  
平洋沖地震は、想定を大きく上回る規模の地震  
でした。福島第一原子力発電所は、その揺れ  
には耐えることができたものの、その後、津波  
により重大な事故に至ってしまいました。

水谷 一つは、原子力発電所の技術者として  
の責任感です。もう一つあるとすれば、「新潟  
への感謝の気持ち」ですね。

中田 感謝の気持ち？

水谷 首都圏の暮らしを支える電気をずっと  
供給してもらっていたということもそうです  
が、私自身、仕事でつらい思いをした時に、趣  
味の登山で新潟の山から大自然のエネルギー  
をもらったり、お米やお酒など美味しい食  
べ物からパワーをもらいました。

中田 あ、わかります！新潟ってなんか元気  
になるんですよ。私も新潟で働いている時と  
そうじゃない時でテンション違いますもん。

水谷 そんなお世話になっている新潟を危  
険な目に遭わせるようなことは絶対にした  
くない。だから、自分にできることを精一杯  
やり、仲間とともに発電所の安全対策に徹  
底的に取り組む。そして、その行動と姿勢を見  
ていただいて、新潟のみなさまに認めてい  
ただけるような発電所にしていきたいと思  
っています。

中田 そうなれるといいですよ。じゃあ、私  
からもパワーを送りましょう。ヤー！

水谷 …(苦笑)



その様子を事故対応の中で目の当たりにし、  
いち技術者として、非常に悔しい思いをして  
いたのを覚えています。

中田 それはつらかったですね。

水谷 でも、それ以上に、事故後、それまで築  
き上げてきた原子力事業者としての信頼を  
失ったことが何より一番つらかったです。

中田 そんな思いをしたなら安全に対する考え  
方や取り組み方も変わったんじゃないですか？  
水谷 はい。失った信頼はすぐに取り戻せるも  
のではないと思いますが、事故を経験した我々  
だからこそ、事故を反省し、その教訓をしっ  
かり活かして、より安全なものを築いていかな  
ければならないという意識を持つようになりました。

中田 教訓って？  
水谷 事故の一番の教訓は、想定を上回る大き  
な災害や事故は、「起こるかもしれない」ではな  
く、「起こるものだと考えなければならぬ」と  
いうことです。ですから今は、より大きな災害  
が起こることを実感を持ってリアルに想像し、  
ここまで考えているんですって胸を張って言  
えるまでとことん高いレベルを追求してい  
きたいと、日々の安全対策に取り組んでいます。

これからどんな発電所に  
していきたいですか？

中田 そこまでとことんやろうって思える、  
その力の源って、何なんですか？



中田エミリー  
新潟出身。NST新潟総合テレビを経て、現在フリー。  
その明るいキャラクターで活躍中の人気のアナウンサー。

Q

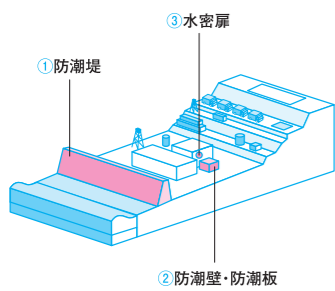
水谷さんが取り組んでいる津波や浸水の対策って、  
他にはどんなことをしているんですか？  
教えて、林さん。

A

はい、お答えします。柏崎刈羽原子力  
発電所では、地震や津波といった様々な  
自然災害に対して、何重もの安全対策  
を準備し、もしもの時に大きな事故に  
進展しないように備えています。今回  
は、その中でも津波浸水対策について  
ご説明します。

福島第一原子力発電所では、想定を大  
きく上回る津波に対する備えが不足し  
ていたことが重大な事故のきっかけにな  
りました。その反省から、柏崎刈羽原子  
力発電所では、防潮堤、防潮壁、防潮板、  
水密扉などの対策を行っています。

発電所では、最大約6.8メートルの津波  
を想定しています。



発電所の敷地の高さは、1〜4号機  
側は海抜5メートル、5〜7号機側は海  
抜12メートルで、その敷地の海側に防潮  
堤(図①)を建設しました。

防潮堤の高さは、いずれの敷地でも  
海抜約15メートルの高さがあり、想定を  
上回る津波にも備えています。なお、  
1〜4号機側の防潮堤は、適合性審査  
の議論を踏まえ、地盤深層部の液状化  
への対策を検討していきます。

想定を大きく超える津波が来たり、  
地盤が液状化して防潮堤が損傷する  
などして、発電所の敷地内に水が入  
ってしまった場合は、原子炉がある建物の  
給気口などを防潮壁や防潮板(図②)  
で覆ったり、建物の入り口に潜水艦の扉  
のような水密扉(図③)を設置した  
りして、建物への浸水を防ぎます。

水密扉は建物内の重要な機器など  
がある部屋の入口にも設置しています。  
このように、柏崎刈羽原子力発電  
所では、何重にもおよぶ対策で、想定  
を超える津波や浸水に備えています。



東京電力ホールディングス  
新潟本部  
本部長補佐 林幹夫

